

川崎空襲を伝える体験談

<p>1</p>	<p>「川崎大空襲の記憶」 相澤 正行(当時12歳)</p> <p>大空襲で家が焼け、何も無い生活になりました。新鶴見操車場近くで、学徒出陣の若い兵士たちがこの世の名残とばかりに、一斉に母と私に手を振りました。「こうして日本人は戦場か本土決戦で死ぬんだな」と思ったものです。</p>	
<p>2</p>	<p>「川崎大空襲 4月15日 悪夢の夜」 井田 元江(当時9歳)</p> <p>空襲警報が鳴り焼夷弾が落ちてきました。家族で六郷橋まで逃げましたが、橋の下は死体の山でした。夜が明けてから橋の上に行くと川崎は見渡す限り焼野原になっていました。</p>	
<p>3</p>	<p>「川崎空襲を伝える」体験談 岡本 美智子(当時14歳)</p> <p>我が家に焼夷弾が落ちて燃え始めたので、父と池の水で消そうとしましたが焼け石に水でした。裏の畠に逃げ込むと、家が崩れ落ちるのが見えました。空が照明弾で昼のように明るく照らされていたのを覚えています。</p>	
<p>4</p>	<p>あの日の事 岸名 利江(当時13歳)</p> <p>近所の山本金物店の防空壕で、私を含め10人ほどでB29が行き過ぎるのを待っていました。小窓を開けるとあたりは火の海だったので、みんなで防空壕から逃げ出しました。少しでも遅かったら全員蒸し焼きになっていたかもしれません。</p>	
<p>5</p>	<p>川崎空襲の体験談 初見 芳江(当時14歳)</p> <p>4月15日の夜、家の周りには火の海でした。家族で川中島あたりに逃げましたが、病身の父がどこへ行ったのかわかりませんでした。幸運にも父は1人で富士見公園あたりに避難しており、翌朝、警防団の方に背負われ戻ってきました。</p>	